

人材マネジメントは「足で稼ぐ」をモットーに

やしろあつし

八代充史 商学部 教授

3年生14名はサブゼミやデイイベント、4年生14名もインターゼミを行い、グループワークを通じて、人材マネジメントを「頭と体」で勉強しています。

八代研究会は、商学部で唯一人材マネジメントを主な専門領域とする研究会です。人材マネジメントとは「企業利益にかなうヒトの管理はどのようなものか、そのために組織と個人はどのように利害調整をしているか」を研究する学問です。例えて言えば、女性活躍推進を「女性の権利」でなく「女性活用は企業にとっていかにトクか」という観点で取り上げるのが人材マネジメントなのです。

当研究会ではグループワークと足で稼ぐフィールドワークを重視しています。これこそが、学生がゼミナールに所属する醍醐味だからです。

研究会の活動は、3年生はサブゼミが中心です。3年生14名は三田祭班と上智、明治、早稲田など7大学8ゼミが参加する日本の経営研究会班のいづれかに所属してグループで研究を行います。両班とも、企業取材や郵送調査を重視しています。4年生14名は卒業論文執筆と秋の立教大学石川ゼミ、横田ゼミとのケース教材を用いたインタ

ーゼミナールが中心となります。

「1年の計は元旦にあり」、研究会は4月第1週の新歓合宿から始まります。ここで3年生は「1分間決意表明」でゼミ活動に対する抱負を披瀝します。同時に、3年生の活動の今一つの柱であるデイイベントを初体験します。5月からサブゼミがスタート、6月、7月に企画書提出、夏休みは私を交えたミニキャンプで先行研究の確認、仮説設定に文字通り汗を流します。9月の夏合宿を経て秋学期が始まる頃は研究も佳境を迎え、10月は郵送調査と企業取材の実施、「秋の日は釣瓶落とし」で時間は刻一刻と過ぎていきます。胸突き八丁の急登を越えると11月の三田発表、12月の日本の経営研究会の発表でゼミ活動はクライマックスを迎えます。1月の追い出しコンパで1年が終わり、すぐに新しい1年が始まります。

以上のゼミの「催事記」から明らかのように、学生は当研究会の専門領域である人材マネジメントを「頭」だけでなく「体」でも実践しているのです。

“人”で繋がる

ふじきけん の すけ
藤木健之介君 商学部4年

人材マネジメントを主な専門領域とする八代ゼミでは、企業利益追求を目的とした人材管理の多様な事象を研究対象とし、企業アンケートやインタビュー等を通じて検証します。多様な正社員の活用や、女性活躍推進、ベンチャー企業における人材確保など、「日本企業のこれから」を考察する機会が多いのが特徴です。

八代ゼミの大きな魅力は、ゼミ内外における社会人との交流を多く持つことです。講演会や、OB・OG会、HRM（ヒューマン・リソース・マネジメント）研究会など多くのイベントがあります。社会の一線で人材マネジメントに携わられている方や、昨年度で20周年を迎えたゼミOB・OGとの繋がりはゼミ生活での財産だと感じています。



心の病や障がいがあっても、その人らしく生きることを支える

ふくだのりこ

看護医療学部 准教授

本プロジェクトでは、精神看護に関わる現象を科学的、系統的に探究することをねらいとし、研究に取り組んでいます。

世間一般に、精神疾患は「よくわからない」が故に、話を通じない、怖い、危険な人として捉えられる傾向があります。心を病むことで抱える苦悩に加え、周囲の無関心、無理解は偏見や差別をうみ、心理的社会的負担を当事者の方々に与えています。苦悩を誰にも打ち明けられず、人とのつながりや回復のための支援を受けることを妨げてしまうこともあります。100人に1人が統合失調症を患い、15人に1人がこれまでうつ病を経験し、がん患者の15〜40%が抑うつ状態を呈するといわれています。また近年、世界中で災害が多発していますが、命の危険があるような体験や悲惨な光景を目撃した際には心の健康を脅かすことが広く知られるようになりました。精神疾患は決して珍しい病気ではなく、誰もが抱える可能性があるのです。

現在、多くの企業や大学において「多様性の尊重」ということが掲げられるようになりました。心の病や障がいがあっても、その人の意思や希望が

尊重され、人となりがながら、自分らしく、安心して生活することが保障される社会は、真の意味において豊かで、多様性を尊重することができる社会だと思います。その具体的な支援の方策や、制度や仕組みを創出していくことに貢献できる看護の先導者、変革者となるべく人材を育てていくことは重要な課題です。「精神看護プロジェクト」は、その基盤となるべき力を養う一つの機会となればと考え、精神看護に関わる現象を科学的、系統的に探究し、研究的思考や態度を養うことをねらいとしています。心の健康課題をもつ人々への看護アプローチという視点から、学生は自分の関心テーマを明確にし、エビデンスとなる論文や資料を批判的に読みすすめています。また心を病む人々の生活や回復の過程、支援の方策や多職種連携について体験的に学ぶことを目的に、学生とともにフィールドワークに取り組みだりしています。

体験的な学びを研究に生かす

鈴木知佳君 看護医療学部4年

私たち福田プロジェクトは、精神看護に関する研究を行っています。私は精神障がい者へのアンチスティグマ（偏見を取り払うこと）について関心があり、先日、先駆的に精神障がい者の地域生活支援に取り組んでいる島根県出雲市でフィールドワークを行いました。精神科看護師による高校生たちへの出張講義や多職種の勉強会、訪問看護などに同行させていただき、机上の勉強だけではわからない、地域での支援を実際に体験するという貴重な機会をいただきました。今後は自分の関心事をより明確にし、フィールドワークで得たことを研究に生かしていきたいと思っています。

